

ブリ種苗放流技術開発事業（抄録）

村山達朗

日本栽培漁業協会が行なうブリ種苗放流技術開発事業の一貫として、ブリの分布・生態・資源動向を究明するため下記の調査を実施した。

1. 標識放流調査
2. 魚体測定調査
3. 漁獲統計調査

詳細は「日本栽培漁業協会研究資料 No.41, 1988」に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

結 果 の 概 要

1. 標識放流調査

日本海区水産研究所と協力して、1989年10月12日に長崎県対馬で尾叉長49～73cm（55cmモード）の1歳と2歳魚954尾の標識放流を行った。1990年2月15日現在、63尾の再捕報告があった。韓国、島根県、山口県および福岡県で再捕された4尾を除いて、すべてが対馬で再捕された。

2. 魚体測定調査

(1) 漁獲物の体長組成の推定

浜田、大浜、大社および境港の4港において、体長測定をおこなった。

(2) 年齢査定

a. 年齢推定に用いた材料と方法

1987年から1989年の間に日本海西部海域を中心に、東シナ海から富山湾にいたる対馬暖流域で漁獲された815個体を用いて年齢推定をおこなった。各魚体は尾叉長、体重、生殖腺重量および胃内容物を測定した。年齢推定は西岡ほか（1985）に従って脊椎骨第17椎体を用いた。ポリビニルアルコールにより採取した椎体のレプリカを作成し、輪紋を計測した。

b. 結 果

最近の東シナ海と日本海側沿岸域における本種の成長は、1960年代中ごろ以降に太平洋側沿岸域で採取されたものの成長と近似していた。また、それは1960年前後に若狭湾と対馬で採取された魚体に基づいて推定したものより成長がよかった。さらに、本種の未成魚では、海域により成

長に遅速の差が認められ、少なくとも3歳魚までは南部の方で成長が速かった。

3. 漁獲統計調査

(1) 島根県の漁況

1989年の島根県のブリの漁況を銘柄別にとりまとめた。

a. モジャコ

島根県のモジャコ採捕は当初6月1日～7月15日の予定で開始されたが、漁況が不振なため7月31日まで延長された。実際に採捕され始めたのは6月末からで主漁期は7月17～18日と1986年並の遅い漁期であった。また、魚体も小型であった。

b. 0歳魚

前年同様に漁況は全般に低調で隠岐島周辺を除いて平年を大幅に下回った。

c. 1歳魚

6月までは、県西部で冬季に比較的好漁であったのを除き平年を下回っていた。しかし、7月以降漁況は上向き、特に8月中旬以降県西部と隠岐島周辺で、旋網漁業により大量に漁獲され、平年を大きく上回る好漁が続いた。

d. 2歳魚以上

冬漁(1～3月)は、好漁であった前年は下回ったもののほぼ平年並みであった。春漁は平年を下回っていたが、8月以降1才魚と同様、旋網漁業により2歳魚(マルゴ)が多獲され7～9月期、浜田港では平年の24倍、浦郷港では平年の7倍以上の水揚げがあった。

(2) 全国の漁獲統計

a. 資料と方法

親魚量として対馬暖流域では長崎県対馬と五島の4定置網の、太平洋側では土佐湾(高知水試、1977-1988)と相模湾(神奈川県水試、1971-1988)の主要定置網の銘柄別月別漁獲量を指標とした。すなわち、 $n-1$ 年の11月から n 年の5月までの銘柄ブリの漁獲量を n 年の親魚漁獲量とし、対馬と五島は1965-1987年まで、土佐湾は1967-1987年まで、相模湾は1970-1988年まで解析した。なお銘柄ブリの体重は対馬と五島では5kg以上、土佐湾と相模湾は6kg以上である。

b. 結果

本種成魚の来遊量は太平洋側と対馬暖流域側の両沿岸域で1960年代以降、長期的には減少し、その程度は両沿岸域とも、いずれも北の海域ほど大きいようである。一般に、本種成魚は日本周辺沿岸域を南北に大回遊すると言われている。これが事実ならば、本種成魚の来遊量の長期傾向には大きな差はみられないはずであり、上述の解析結果と矛盾する。本種成魚が南北に大回遊すると言う説は、1960年代以前に行われた標識放流の結果から得られたものであることを考慮すれば、同年代を境にして本種の生態に何らかの変化が生じた可能性が示唆された。